

常宮昌子内親王の紀行文

中澤伸弘

はじめに

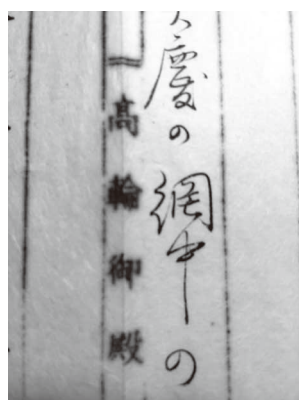
明治天皇の第六皇女常宮昌子内親王（明治二十一年御降誕・後の竹田宮恒久王妃）は、明治三十六年六月に大阪で開催されてゐた第五回内国勸業博覧会及び京都御見学の為に、妹宮である周宮房子内親王（明治二十三年御降誕・後の北白川宮成久王妃）御同伴にて関西方面へ行啓になつた。御年、数へ十六歳である。此の時のことを御書きになられた御自筆の紀行文が私の手許にある。六月三日から二十三日に亘る二十一日間のもので墨付六十一丁の関西往復の紀行文である。

書誌 並びに購入の経緯

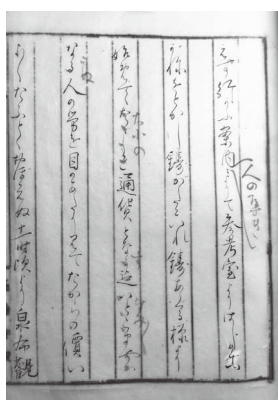
和本 仮綴（一箇所を麻紐で大和綴）表紙、裏表紙共紙一葉（書名、標題等の記載なし）縦二十五糎、横十七糎内題等なし 本文墨付六十一丁 一面（半丁）に十行の罫線を紺色で刷り（一枚で左右二十行）版心中央の折り目下に「高輪御殿」と刷られてある（写真①「高輪御殿」）。文章は一行空きで毛筆で書かれ、所々に朱で加筆訂正がなされる。文末に欠損あつて、東京帰着後の感想が途中で切れて未完 どこにも著作者の記名がない。

本書は先年古書肆から購入したものである。標題がなく、また誰の著作か著者についてもその記名を欠き、文字の流麗さと内容が面白さうなので偶然購入したものであつた。

但し、和紙に青色に摺られた野線の中央の版心下に「高輪御殿」とあることが気になつてゐた。高輪御殿は麻布区西台町一番地に明治二十四年に、明治天皇の皇女である常宮昌子、周宮房子両内親王が御住まひになられる為に造営された御殿で、後に高松宮宣仁親王がお住まひになられた御殿である。本文は流麗闊達な、「かな文字」を中心に書かれたもので、所々に幼い文字遣ひが見受けられるので、ま



写真①「高輪御殿」



写真②「訂正箇所」

だ幼い少女が書いたものであることがわかる。また全体を通して所々に朱での添削がなされてゐるが（写真②「訂正箇所」）、その添削主も明確にはわからずにゐた。

著者の断定

最初の方に「第五回内国勸業博覧会をみんなていでたつ」とある。この博覧会は大阪の復興を掲げ、明治三十六年に初めて大阪で開かれたものである。著者については高輪御殿に勤仕してゐた女官が書いたものだらうとの直感が働いた。女官が皇族に供奉して旅に出た紀行文と考へてみたがその皇族の記述がない。一人の旅でもなささうであり、また記憶にある中では初めての関西行きとあつてまだ若い人のやうである。初めの方に「我師下田歌子も同伴なれば」とある。下田歌子を師とする女官なのだなど作者の推測が得られるやうな気がして読み進めたが、我師を呼び捨てにし、ところどころにある朱の添削も、この「下田歌子」に対してはない。師の君であるのだから、敬語があるべきであらうにとの疑問を抱きつつ更に読み進めたが、次第にこれは一般人の筆致ではないと思はれてきた。

文末の新橋到着後の記述に「御父母両陛下 御兄宮同妃殿下の御使を始め久邇宮北白川宮満子女王その他宮内大臣はじめあまたの人々の出迎へらるるをうけ」とある。六月

十四日の記述には、明治天皇の産湯に使った祐の井（明治天皇は祐宮と申し上げた）を見学した条に「中川主殿助のあいにより祐の御殿祐の井等を見つ。ここにて（改行）父帝のあれまし、所ぞきけば、何となくその折のこと忍ばれてなつかしさいはん方なし。」とある。明治天皇を父と書いてゐるのである。そして泉涌寺に詣でては六年前に薨去された英照皇太后を御偲びするなど、これは明治天皇の皇女の手になるものと判断した。

下田歌子の伝記である『下田歌子先生』の巻末の年譜を見れば、明治三十六年の六月に常宮・周宮両内親王殿下の関西ご見学に随行したことが書かれてゐる。これにより本書はお二方の皇女の何れかの方の著作であることが明らかとなった。さて、それではどちらの内親王のものなのだろうか。其の判断の材料を求めて読み進めたが、「我等」とのみあつて、どこにも同伴の妹（または姉）の記述はない。そのやうな中で帰途静岡に立ち寄り、神部浅間大社に参拝した記述が注目された。そこに「こ、は先年もまうでし事あれども、其折はいまだ幼なかりければ今ハ露ほどもおぼえず。」「此の境内には、去る廿五年當神社へ詣でし折植ゑたりし児桜あり。」との記述を見出した。これによつて、作者は明治二十五年に当地へ行啓され、桜をお手植ゑされたことがわかる。お二方のご誕生は常宮昌子内親王が

明治二十一年のお生まれ、周宮房子内親王が二十四年のお生まれであるから、二十五年には数へ五歳、二歳であらされた。五歳でのお手植ゑなら可能であらうと判断し、この筆者は常宮昌子殿下であり、数へ十六歳の時の御作品と考へた。

常宮昌子内親王は明治天皇の第六皇女で、明治天皇の皇女としては初めて成人なされた御方で後に竹田宮恒久王に降嫁した。昭和十五年に五十一歳で薨去されたのち竹田宮家では『松のしらべ』と題した昌子妃の歌集を編まれてゐるが、そこにはこの紀行にある歌は採られてゐない。若き日の御作であるからか、もはやその当時この紀行の存在が知られてゐなかつたからであらうか。

筆者

高輪御殿において、この旅の後に、紀行の課題を下田歌子に提出されたとすればご本人の筆であらう。添削があるから、他者が清書したものであるまい。日ごと書き足したのではなく一筆であるから、旅行後にまとめて書かれたものである。下田歌子に敬語が使はれてゐない点から（自分に対して敬意は添へられないから）、朱の添削は歌子に違ひあるまい。それにしても十六歳とは思へないの文字の書きやうである。どこかに幼さが残る筆致もある一方で流麗な

筆つきが殆どで、かなり仮名書きの手習ひに熟練されてゐたことが分かる。その記述内容も十六歳のものであるとは思はれない内容である。そしてこの添削はこの旅に供奉した、師の下田歌子の添削であると思料される。当時の皇女の教育の内容がかなり高いものであつたことが本紀行からもわかるものである。

それにしてもこの紀行がどのやうにして坊間に紛れたのか、まためぐり巡つて架蔵に帰した不思議さを思ふのである。あの時「高輪御殿」の文字が目に入らなければ手が落ちることもなく、そのまま誰の著作とも知れずに処分される憂き目になつてゐたかと思ふと、なんとも言へぬ感慨に身が包まれるのである。

○翻刻凡例

- 一、変体仮名は普通の平仮名に改めた。但し踊り字（ゝ、ゞ）はそのままとした。
- 一、本文には句点、句読点、濁点はないが、便宜上適宜つけた。
- 一、漢字は正字と略字体を用ゐて書いてあるが、そのままとした。
- 一、改行は意識せず、そのまま文を続けたが、和歌のところにについては改行した。
- 一、本文には所々に朱で加筆訂正がなされてゐるが、訂正された文のみ翻刻した。
- 一、判読できぬ文字は□とした。

（本文）

やよひのはじめつ方より大坂にひらかれたりし第五回内国勸業博覽會を見んとていでたつ。日は六月三日とさだめつ。もの知り初めてより国府津より先は更に知らず、さるはいといわけなかりし折、そこよりや、先迄行きつることもありと聞けど、いとおぼろげにのみ覚えてさだかならねば、こたびをはじめとこそはいひつべきなれ。さればをかしと覚ゆる所々とく繪にか、まほしき所数知らず。こたびは我師下田歌子も同伴なれば、汽車の窓より名所古跡などかしここ、と指さし教へらる。されど直行の汽車なればこ、かしこに数多度とゞまる事もなければ、よく見る程もなく走り行くこそいとくちをしまりしか。されど遠き旅路を事なく行かへりて、おもしろかりし博覽會の様どもおぼろげながら書きあつめ置かんと筆をとりつ。

六月三日

朝七時十分に出で立ちて新橋に至り、見送りする多くの人にわかれて八時に発車す。汽車の進みいとくいていつか数多の驛を過ぎ、箱根の山ちかきあたりにいたれば、ちりばかりなる雲もかゝらで空高くそば立てる富士の高峯の、ゆたかなる姿をうちあふぐするがなる不二の高峯をうち見れば夏ともわかずゆきのつもれる。

などうちずしつ、行く程、三保の松原近かう見え渡る。

たどふべきものこそなけれ大空のみどりにつゞく三保のまつ原

海山の景色筆紙にはつくしがたし。かゝる景色をこそとおもへどいとかなひなし。様々の物語するほど瀨名湖のほとりになりければ、窓よりあなたこなたをながめつ、行くうちに、遙かに名高き金の

鯨のきらめきて見ゆ、と思ふ程なく名古屋につきぬ。豫てよりこ、に一泊せんと定め置きければ、第三師團の將校等いでむかへぬ。停車場にしばしいこひて人々をねぎらひし後、離宮をさして行く。道すがら兵士などの立ち並びてむかへたる様、赤き心のほど見えていとうれしかりき。六時近き頃離宮につきぬ。古き城のうちになるやかたの珍らしくて、襖壁などを見る。こ、かしこの縁はうぐひすばりなれば、時ならぬにゆかしき春の聲をきくこ、ちしとおもしろし。しばしありて後、臥戸にいりたれど明日の事ども思ひやられていねもねられず。いとたのしく思ひあかしつ。

六月四日

朝とく起きて天主臺にのぼり四方を眺望す。かしこは小牧長篠など、あないの人さし示す。晴れたる日は大山の城も見ゆれど、今日は曇りたれば影だになしといふ。しばし立ち休こひ下りぬ。こ、の堀内には名高き黄金の井戸あり。やがて時なりぬといへば停車場にいたる。道すがら見送りの人々昨日にかはる事なし。汽笛の聲と共に車は走り出でて、また、くひまに一宮大垣などの驛をうちすぎ、関が原のあたりにいたりけるをりに、

武士の露ときえにし関ヶ原こ、やむかしの戦のには

といふほど、琵琶の湖の見えそめぬ。近江八景はかしこ、のあたりと教へられつ、車の窓よりのぞきもてゆく。

名にしおふ瀬田の長橋車よりうちわたしゆく旅ぞたのしき

これより程なく京都をうちすぎ、午後三時頃大坂につきぬ。

車より四方をながめて行く程にはやおほさかにつくぞうれしき

停車場は第四師團將校、知事をはじめ多くの人々出迎へられたるをうけつ、四時頃茶臼山なる住友の別邸に着きぬ。今宵は我等が爲にとて六時頃よりイルミネーションもまうけられて、いとう

るはしく、ふくる迄眺めていとたのしかりき。

六月五日

今日は天気ことの外よくてうれしけれど、朝とくよりふし戸をはなれ、露ふかき庭の芝生を逍遙し、小高き岡のあづまやにのぼりなどしつ、あるほど、時なりぬれば先づ博覧會正門より入り美術館を見る。刺繍、彫刻、繪画などのたくみな品々あり。そが中にも天鷲絨にて織出せる世界三大景、獅子の縫ひとりなど、いとすぐれたるやうに思はれたりき。それより十二時二十分、御料局の建物のうちにてひるげたうべ、後一時二十分、日本赤十字社出品部にいたり、野戦病院にて用ふる品々、擔架など見終りて、臺灣館、アンドルスジョージ館、教育館などを見、三時頃に旅館に帰りぬ。臺灣館にては土人の用ふる舟器具、武器、風俗などの有様のうつせるを見たり。

六月六日

今日は工業館より、東京府出品館、陸海軍より出品せるものどもを見る。ひる過る頃よりは第四師團司令部に行きぬ。こ、は大坂城趾なり。や、憩ひて天主臺にのぼり、遠き山々を望みなどしたる後、軍樂隊の奏樂、偕行社附属小学校生徒の唱歌などを聞く。また歩兵集合、銃槍仕合などを見たが、かたみに関をつくりて攻めよする様、勇ましなどいふばかりなかりき。夕ぐれより協賛會に行き、楼上よりイルミネーションを見る。今日は一日おほかたこ、かしことありきめぐりて、宿りにある事少なかりしも、さばかりつかれもおほえざりき。

六月七日

天気よし。八時三十分より工業館に行き、焼物、織物、銅鉄の細工などを見、愛知縣別館にてしばしいこふ。こ、には七寶焼の麗しき花瓶などい多く、げにこたびの博覧會のうちにも、この焼

物などは殊に勝れたる由、人の云ひつるがさもありぬべく思はれぬ。十一時過る頃、例のところにいたりひるげをたうべ、それより参考館、ヘルム館、マツフエー館、ホーン館等を見めぐりぬ。参考館にては諸外国の種々の出品あり。それより加奈陀館、冷蔵庫等へ行く。この庫は実にいと冷やかにて、時ならぬに梅藤などの花盛りに咲き匂ひたり。なほ進み行けば白雪つもりて夏なほ寒き心地す。かくあまりに寒暖の変化はげしければ、奥ふかくは入る事を得ず。

六月八日

けふは造幣局、泉布観、砲兵工廠などに行く。出で立つ時は昨日と同じ。先づ天神橋を渡りて造幣局にいたる。こゝ、景色いとよく、前面に生駒山金剛山比叡山等を遠く近くのだむ。前はすなはち淀川にて川舟絶えず。行かふ案内人の導きによりて、参考館よりはじめ、こがねをとかし鑄がたにいれ、鑄あぐる様より始めて大小の通貨となす迄、なみなみならぬ人の労を目的のあたり見て、たからの價いよいよたふとおぼえぬ。十一時頃より泉布観にいたりひるげをたうべし後、秀吉の遺物、軍配扇をはじめ、様々の古器物、席上揮毫、及び千瓢會出品の各種のひさご等を見し中にも、秀吉の遺物なる獅子丸の甲冑はいとも名高き物にて、其彫刻金具などは今の世にも稀なる物なるよしなりき。かゝりける程にあなたの舞臺にて鼓のしらべおもしろきこえ、やがて今様の舞、吉備樂などはじまりぬ。しばし見たる後こゝをいで、二時三十分より砲兵工廠に急ぐ。あないのまゝにみちびかれて、各製造作業局を見めぐりし後、消防の演習をも見たり。けふはかしこゝにて金の流れはがねの漣などを見つ。いとあやふき業なれども、これ等の業する人々は、なれたる様にて事もなげに働く様、いといみじくおもしろかりき。

六月九日

今日は天気よし。八時三十分にいで、午前は機械館、通運館、水産館、林業館、農業館、植物温室等を見廻りぬ。通運館にては船の模型、昔今のふみのゆきかひぶり、其他種々のものを見、日光丸の談話室にてしばしいこふに、後よりは書画俱樂部、體育會、動物園などをめぐりつ。七時頃より正門の夜景を見んとて行きぬ。第五回内國勸業博覽會と記せる十の文字を、電氣にて筆もてかきしるす如くに點じあらはすなど、実に世のすゝみ行く様見えて、目驚かる、事ども多かりき。

六月十日

今日は朝のほどよりくもりて、雨すこしふりつれどやがてやみぬ。こたびあらたに設けられたりといふ南海鉄道博覽會門前驛を、八時五十分が発車し、九時二十分堺につき、水族館にいたる。こゝには様々のめづらしき魚ども、あまた玻璃もて天井などにかこまれたる、其内の岩のたゞずまひ、藻のつける様まことの海とことなる事なく、潮水絶えず行きめぐれば、魚も海中に在るがごとく、かれひなどの平たき衣かとも思はるゝばかりなるもあり。其他種々珍らしきものあり。

海原のそこすむなるいろくづもあふぎ見るよとなりけるかな

十二時過るころ、こゝをいでてかの名高き妙國寺の蘇鉄を見る。僧いで、由来など委しく物語りぬ。かくて住吉にいたり数多の杜かしここ、ふしをがむ。

大空のみどりにつゞく住吉の老木のまつは幾代へにけむ
三時過るころ大坂に帰る。

六月十一日

朝の程より雨ふる。いとわびし。けふは阿部野神社にまうづ。こ

のところの小学校の生徒らあまた雨にぬれつゝ、立ち並びて、我等をむかふるさまいとあはれなり。それより大坂女子師範学校に行く。こゝには堂嶋、清水谷両高等女学校の生徒も集ひ居り。各生徒の製作品、繪画などを見るうち、時うつりぬれば急ぎこゝを出て、生魂神社、高津宮などにまうで、帰路天王寺を見る。この高津宮にて我等のいこひし所は、昔仁徳帝の民のかまどをみそなはし、古跡なりといふ。今はかまどの烟もにぎはしければ、神もいかによろこび給ふらんと思ふもいとかしこし。こゝに後桜町天皇の忍びて行幸ありし折、用ひ給ひしといふ御しとね今なほのこれり。天王寺には此度つくられたるいと大なる釣鐘あり。池にはあまたの龜すみて、与ふる麩をとらんとてあらそひ浮びつどふさまいとおもしろし。この地に来りしより今日迄は一日も雨ふらざりしに、けふはあやにくのそらのもよひで、いといぶせかりける。

六月十二日

今日は天気よし。この地に着きてよりはやう一週間にもなり、博覽會も見はてつれば、あすよりは京都に行かんと調度どもとりしと、めなどし、日ひと日を暮す。われ等の此地に來りしを、民どもよこびて出で歩く度毎に、数千の人々たちならび、あるは近うよりつどひするなかに、いとしたしくなりぬる心地しけるに、もはやこゝをあとにして立ちいづることよと思へば、いと名ごりをしう覚ゆ。なほ今日を限りと思へば、茶臼山の松のけしきも一しほゆかしく、ウオーターシュートの音、イルミネーションの光も我等をとむる心地す。

六月十三日

けさ梅田の驛を發し京都にむかふ。十時三十分京都市七條停車場につく。こゝよりたちち博物館に入りひるげたうべなどす。こゝには古人のみづぐきのあと、その他得がたき品々多く陳列し

たり。それより豊國神社、大佛、方廣寺等を廻り、清水寺にゆきては、かの名高き舞臺より四方をながむるに、京都市たゞ一目なり。豊公の廟を峰たかく仰ぐ。それより音羽の瀧を見る。むすび見るにいとめたし。

あをあとと若葉しげれる音羽山おちくる瀧の音もすゞしき

かくて道すがら祇園の夜桜の青紫さしたるを見て、八坂神社にまうづ。宝物などを見めぐりて後、知恩院に行く。こゝはいとひろくて、廊はいたるところおほかたうぐひすばりなり。又庭の池には河骨など花さきていとうるはしき眺めなり。かの名高き傘は辛うじて見出でつ。また多くの人の釣鐘をつく様を見る。それより南禅寺の疏水を見、動物園に至る。此処には故小松宮のめで給ひし鶴など、さびしげに立るを見るもあはれなり。それより大極殿前をとほり、荒神橋を渡り、かねて旅館と定めたる久邇宮御邸につきぬ。前面は東山をのぞみ、加茂川の清き流れにそひたり。ぬのさらしの景色など絵にもかまほし。又夕ぐれになれば河鹿の聲もきこえ、暮れもてゆくまゝに螢おはんとて、里のうなあらうちむれてさわぐ等、ありし都にしらぬけしきなり。この川、水音高くて常に雨そぐ如きこえ、朝夕はひとへの衣手さむきばかり涼し。

六月十四日

午前、旅館にあり。午後より両御所、並に二條離宮にまゐる。道すがらまづ中川主殿助のあなにより、祐の御殿、祐の井等を見つ。こゝにて

父帝のあれまし、所ぞときけば、何となくその折のこと忍ばれて、なつかしさいはん方なし。それより大宮御所にまゐり、御車寄より御中殿、常御殿等をめぐりぬ。また仙洞御所なる紀貫之の碑、人麿の社、榮螺山、楓山などを見、御茶室醒花亭にてしばし休み、

こ、をいで、御所、宜秋門よりいり、御車よせよりのぼり、清涼殿、紫宸殿にまうのぼりし後、小御所、御中殿にてやすみ、御学問所、常御殿、迎春殿などを廻る。紫宸殿前の桜橘樹、清涼殿の日の御まし、夜のおとゝ、昆明池の障子、朝餉の間、櫛形の窓などを見れば、文の上に学びし昔のありさま、目の前にうかぶこ、ちす。それより二條離宮に行き、正門、中門、唐門等をへて、御車よせにいたり、各御殿を見、こ、の三階にてやすむ。ここのけしきはいとよく高殿なれば、何度もたゞ一と目なり。かくて後、城址にのぼる。嵯峨御室などあなたに見え、けしきいはん方なくをかしかりき。

六月十五日

今日は八時に出で立ち、泉山御陵を拝せんとす。まづ夢の浮橋を渡り、程なく泉山にいたりつき、直に孝明天皇の御陵を拝す。それより英照皇太后の御陵にまうづれば、御園に植させ給ひて愛で給ひし樹木の、こ、に移されて今なほ緑深く生ひしげり、そよと吹きくる風の音に、打ちさ、やくを聞くにも、何となうあはれにおぼゆ。六とせのむかしは世におはしまし、ものを、今はこの陵の下にしづまりますかとおもへば、袖の上たゞならず、只いまし、御代のことどもかれこれとしのぼる、ぞかなしき。それより代々の帝の御陵を拝して後、泉涌寺にいたり、靈明殿にて代々の帝の御位牌を拝す。こ、の住職この月輪といふいはれなど委しく語りぬ。午後はいづこへもゆかで、おとづれくる人々にあひ等し、夕つけては前の河原におりたちて遊ぶ。

六月十六日

けふは天気よし。まづ下上の加茂の社にまうづ。

大君の栄ゆく御代をまもりましますかのやしろをけふあふぐかな

しげりあふたゞすの森を吹きわたるかもの神かぜなつとしもなし

それよりまつりの時用ふといふ、昔ながらの装束、及びいろいろの宝物などを見る。

大神のめぐみのつゆとみたらしのきよきながれをむすぶ今日かな

ひるすぐる頃よりは、梨木、北野、平野などの多くの神社にまうで、後、金閣寺にいたる。道すがら田植をみて、

もろこゑに田歌かたひて賤の女がいとまなげにもさなへとる見ゆ

やがて金閣寺にいたりつきぬ。しばしいこひて後、雛僧のあないによりて金閣にのぼる。池中の石の名などをこゑ高らかに呼ばひたる、いとをかし。かなたに衣笠山すがたをかしそびゆ。池の魚に魅を与ふれば、数しれず浮び出で、餌をあらそふさまいと面白し。かくてこ、を下りて、庭づたひに拱北楼にいたり、こ、にてしばし息ひて、さて仁和寺、野々宮等にまうづ。仁和寺にては、故小松宮の御遺品、並にくさぐさの宝物などを見る。こ、をいでて小山をのぼることしばらくにして、繁り合ふ竹村に出づ。其中を分けつ、野々宮神社にいたる。この宮はむかし齋宮の野の宮におはしましありさまこそなど文にもあれど、今はまうづる人もあらずなり。宮守る人もなくあれはてつ、只黒木の鳥居のみ昔のかたのま、にのこれり。

みやしらはあれはてたれど今もなほくろ木の鳥居くちのこりけり

なほ山をのぼり、辛うじて嵯峨村にいり、東本願寺の別邸にいてこふ。かくてはし居して眺むれば、前面には嵐山、屏風のごとく聳え、大井川其ふもとを流る。げに春ならば花の雲につ、まれ、

下ゆく水も香にはほふらんを、今は青葉しげりていづれ花の木末
ども見えわかず。このやま紅葉のころは、又いかにうるはしから
んとぞ思ゆる。き、及びし渡月橋、となせの瀧、千鳥がふちなど
左右に見ゆ。我等のけふこ、に來つるをよろこびて、里人つどひ
花火うちあげなす。

春過ぎてはなはなけれど嵐山青葉の陰もなつかしくして

夕げはて、後、川岸にいたり、そこより舟にのる。まだはやけれ
ば螢もいず。かしこ、棹さしめぐる程、やうやうあたりくら
うなりもて行けば、岸にはかぎり火をたき、うちあぐる花火の音
いさましくおもしろきこといはん方なし。温泉のあたりよりは、
ひき舟にてのぼる。このあたり丹波路にかよふ汽車の隧道あり。
折しも汽笛きこえて車はこの内に入りぬ。地鳥がふちのあたり、
岩間の牡絹花今を盛りと咲きたる。いとうるはし。ふくるま、に
螢のかげ左右の草むらにもえたちたる。とらんとすれど空高くと
び行くを、棹もてとり、又は竹むらに水をそ、ぎなどしていとた
のしく、あまたとりあつめしを、たづさへし籠にいろ、などたの
しさのかぎりなりけり。かくてあまり小夜ふけ、れば、舟より下
りてさきにいひし所にいたり、帰路につく。田の面につく細
道をすぎゆくに、いづこにもいづこにも蛙の聲きこえければ、

あし引の山田のかはづさなへとるしづにもなれてたえず啼な
り

この道いと遠く覚ゆ。二里ばかりもやありけん。其の夜十時過る
ころやうやう旅館にはかへりつきにき。

六月十七日

今日も天気よし。午前修学院離宮、赤山神社、詩選堂、銀閣寺に
行く。先づ修学院離宮にいたり、隣雲亭にいこふ。この庭前には
光格天皇の御手植の楓あり。こ、は最高き所なれば、四方の景色

いとよくて、ひきめぐらしたるやうなる山川たゞ、一目なり。古、
靈元上皇の、遠方の山より上にと詠じ給ひしも、うべなりと見ゆ。
この亭の後の方に滝おとしたり。水清く木がくれたる景色いはん
方なし。うるはしき小石など拾ふ。それより窮遂軒、千歳橋、楓
橋、紅葉道などを見る。いづこも面白き処にて春のつ、じ秋の紅
葉など如何にうるはしからんとぞ覚ゆ。庭づたひにて赤山神社に
至る。このやしろの由来はふみにも見えたり。それよりまた再び
帰り、中の離宮にいたる。中の離宮はもと林丘寺と称する勅號あ
りて、光子内親王門跡となり給ひき、などいふことゝもくさぐさ
の物語あり。この御茶屋を又柴只軒といふ。正殿、杉戸襖、小襖、
壁張付などの繪は、皆名人の筆にて、山鉾の図、友禅染の図、又
雲上人の筆なる離宮八景などは、古びたれど目をおどろかさばか
りなり。中にも住吉具慶の、網中の大鯉の図はいとたくみにて、
ふすまをぬけいで、池にをどりいたりと傳ふるも、空言とは覺
えぬ迄見ゆ。下の御茶屋にいたる。こ、もまた風景絶佳にて苔青
く水清し。それよりこ、をいで詩選堂にいたる。こ、は石川丈山
の住みし所なり。一人の尼のあないにて種々の遺物を見る。次に
銀閣寺にむかふ。こ、は金閣寺に比しておとりざまなり。時うつ
りてひるに近ければ、吉田神社へもまうてまほしかりけれど、人
してぬき奉らしめいそぎ帰る。

午後よりは高等女学校、和氣清麿をまつれる護王神社、盲啞院、
染織学校、美術学校に行く。盲生、啞生の、不自由なる身もて
種々の事を学ぶを見れば、ひとしほあはれにて、目の見ゆるもの
いかでいたづらにあるべきか、などぞおもひし。はじめ八つ九つ
ばかりなる男の子の、目しひたるが、けふ我等のこ、に來つるよ
ろこびを文につくり、あまたの盲生に代りて聲さわやかによみい
でし時は、いたはしき限りなく、めの見ゆるものなりせば、我等

のすがたも見ましものを、只心のうちにおしはかりてよろこべるさま、いとあはれにて物たちどころにふたがり、すゝろに涙さしぐまれぬ。ともの人々皆袂をうるほしたり。また嘔生は目こそ見ゆれ、物いふすべをしらぬものなれど、ひらけゆく御世のめぐみには、おぼつかなくも物いふ事を得て、こも亦我等の來たるよろこびをのべたるにおどろかれぬ。よのつねの人々だにあるを、況てか、るたらはぬ人々を教へ導く教師の勞苦、いかばかりならんとまづおしはかれぬ。それより染織學校にいたれば、うるはしき花などの模様をたくみに染織なすめり。美術學校にては、繪画、彫刻などを見る。繪画の所にては、老いたる人をたゝしめ、数多の生徒其まはりよりこれを写生し居たり。又鶏、家鴨のひな、鳩などを籠に入れて、ゑがきいたる、いと愛らしかりき。

六月十八日

天氣よし。午前桂の離宮に行く。下御靈神社の前を過ぎ、桂川の橋を渡りて離宮にいたる。こゝは御茶屋も庭もみやびをつくされたり。まづ御幸門をいり、左にをれて待合を経、蘇鉄山にいたり、四つの腰掛を見て後、圍にいたる。此道すがら右の方池のうちに、天の橋立の景色をつくられたる、面白し。この地に赤き河骨ありいと珍らかなるものなり。こゝをのぞきて他にある事なしといへり。又この圍は、八つ窓の御茶屋ともいふ。此の八つ窓の東池にのぞみたる処、石をたゝみ手洗所とす。さゝやかなる柄杓の、石にかけ渡したるところなどいとかし。これを流の流水といふ。その右の方に中廣き石橋がかれり。これは奥州白川の石なるよし。松琴亭より西の中嶋に土橋あり。この下を蛭谷といふ。それより賞花亭に行く。亭の後に桜あまたあれば、かくは名付られたりとぞ。又こゝを龍田屋ともいふ。そは楓樹多くて秋の頃の紅葉の景色よきによりて、此の名あり。池にのぞめる所に石燈籠たゞ一つ

立てり。此光の、池水にうつるかげの蛭のごとく見ゆればとて、銘を水蛭といふとかや。園林堂をすぎ、土橋を渡り笑意軒にむかふ。こゝも御茶席なり。北の方のふすまの引手なども、種々みやびを極めたるもの多かりき。このあたりの事どもは文などにいとこまやかに見ゆれば、こゝには記さず。それよりこゝを出で、綿ねる會社にいたる。こゝにては織物會社に行き、種々うるはしき織物を見たり。それより平安神宮にまうで、杜内の池にさける花あやめを見て、それより博覽協會に行く。この建物は先年この地にて博覽會の開かれし折の美術品なりきといふ。あないみじ。よりて織物、焼物、其他この地の産物、いと多く陳列せられたるを見る。また別館の方には、いにしへの器具、装束、武器その他種々ありて、ものまなぶ我等にはいとよき参考となりぬ。

六月十九日

天氣よし。朝七時のいでたちにて伏見稲荷へ行く。其道すがら、電車のうちにて人々の語るをきゝつゝ、行くほどに、はやう伏見につきぬ。それより直に稲荷にむかふ。さだかに残るあとはなけれど、このあたりは大石良雄のかくれすみし所ならんと、思ひやりつゝ、行くうち、いなりにいたりつきぬ。しばしいこひて後、まうづ。それより立ち並ぶ赤き鳥居のうちをすぎ行けば、こゝに又さゝやかなるやしあり。其かたはらに後醍醐天皇の古事しるしたる石ぶみたり。その面に左の御歌を記されたり。

鳥羽玉のくらきやみにまよふなりわれにかさなん三つのともし火

こゝよりまた数しぬ鳥居のうちをすぎて、下り行けば荷田東丸の杜あり。こゝをいで、三十三間堂より妙法院へ行く。三十三間堂には昔の名工のほりし佛體の、今は国宝となれるものあり。妙法院にて、孝明天皇の御位牌を拝す。それより直に東本願寺に行

く。こ、にてしばし息ひ、毛縄などを見、やがてこの寺中に設けられたる火防噴水を見る。こは昔よりこの寺の、数度火災にか、りしが故、近時この禍を防んとて設けられたるものにして、其の水の高さ、百三十尺餘迄上り、飛沫四方に散乱して衣をうるほせり。一大奇観なり。それより龜山天皇、孝明天皇などの御位牌を拝し、ふたたびもとの所にかへりて、しばし憩ふ。それよりこ、をいで、西本願寺へ行く。こ、にも多くの僧侶裏方□子など出でむかへられたり。それよりあないによりて、まづ設けられたる席にてしばし休みてのち、所々を見めぐり、孝明天皇の御位牌を拝し、また別に設けられたる所にてしばし憩ひて後、飛雲閣を見る。こ、の襖壁などの画は、何れも名工のかきしものなり。中に床の張付の富士山の画は、狩野元信の筆にて、座して見あぐればほのかに山の姿見ゆれども、あひむかひては見えず。こ、は近きころ、ちかき所に火事ありて、いとあやふくその構の内なる木々のやけしもたてり。さればその折とりはづしたる畳、障子などみなつまかさねられ、あたりのさまいたくあれて、あやふげなりしが、なだかきたてもなればさすがに見どころあり。たゞちにこ、を出でて、神宮奉齋會に立より遙拝してかへる。午後よりはいづこへも行かず。けふ我師下田歌子の、東京よりの電報を得たるにより、我等より先にかへるといいま乞ひに來にければ、なにとなく名残惜しく、今二日三日にてもろともに帰るべくおもひしかど、なほつとめある身なればしひてとゝむる事も能はず、いとくちをし。夕つ方より鴨の川原に出で、小石など拾ひ遊ぶ。

六月廿日

此地に來りしよりまだ日数浅きやうに思はるれど、はやう十日近くもなりて、神社佛閣も名高きものは見たれば、この地の人々はいますこしとどめけれど、こたびは大坂にむねとものせしな

れば、なごりはをしけれど、あすこ、を立ちいづる事と定めて、今日はいづこへも行かず。とひくる人々にあひ、又何かと調度などした、めなどするほどに、夕つ方になりぬ。今日も亦人々とうちつて、前の川原に行き、なごりなれば東山の景色など見るほどに、学校生徒のあなたよりおひおひ近づきくるも、我等になごりを惜しみてにや。又夕つ暮より、しづ子女王の、御なごりなればとて訪はせられければ、しばし諸共に端居して物がたるほど、蛩とびがひ、かじかの聲もきこえて夜ふけぬ。

そらにとぶ蛩の影も水にすむかじかの聲もなごりなりけり
六月廿一日

けふ此地を立ちいづ。幸いと天気よし。七條迄は電車にて行く。道すがら高等女学校生徒等立ち並びて、我等を見送れり。停車場に至れば賀陽の宮、久邇宮しづ子女王をはじめ、府知事、東西本願寺法主、裏方、其他あまたの人々に見おくられて、八時ばかりに発車す。道すがらのけしきは前とかはる事なければ記さず。熱田にて下車し、熱田神宮にまうづ。折から大祭物する程にて、いとにぎは、し。されど警官等の注意の行届きし故、路傍には綱ひきわたし、道をはき清めなどして、さまで雑沓も無かりき。かく人々の、我等のために心を用ひくる、よと思へば、いとうれし。それより神嘉殿にて拝しをはりて、直に宝物を見る。こ、には古の武器などの、今はなかなかに得がたきもの多かりけれど、よくは覺えず。

千早ふるあつたの宮をゆくりなくをろがむけふぞうれしかり
ける

この宮は、三種の神器の一つなる、御剣をまつれるよしなるが、げに宮居のありさま昔のまゝにていとたふとし。それより停車場に立ちもどり、直に名古屋にむかふ。こ、にても多くの将校等の

出むかへをうけ、しばし休みて後、本町を直に離宮に行く。城内に立ちならぶ兵士は前と同じ。実にこれら軍人は、一度ことある日には命をすて、君国に、為につくすと思へば、限りなくたのもしく、また何となくあはれにも思はれたりき。此夜はこゝにて一泊す。

六月廿二日

朝名古屋を立ち出で、三時過るころ静岡につく。道より雨少しふりいでけれど、着車の頃は折よくやみぬ。停車場よりたゞちに御用邸にむかふ。こゝにても尚、旅団將校、其他、縣官達出でむかへ居り。又道すがらも学校生徒ら多く立ち並びて、我等を迎ふるを見たり。御用邸につき、しばしありて後、雷とゞろきて又あめふりいだしたる折から、縣知事等とひ来しかばあひなです。此庭のけしきもいとよし。雨の名ごりの露をかざれる芝生、とび石などのさまいとおもしろし。下りたちてうるはしき小石など拾ふ。又このやかたは今日見るが始めなれば、所々を見廻り、たかどのに上りて四方を眺むるほどに、はやう日は西山にいりはてたり。こよひ一夜にて明日は都にかへるよと思へば、夢の如くにてなごりをしく、いますこしこの地にもありたき心地もせられ、又何となくうれしく思はれけり。

六月廿三日

天気いとよし。今日は都へかへる日ぞと思へば、さすがにいとうれしかりき。朝八時半に旅館を立ちいで、浅間神社にまうづ。こゝは先年もまうでし事あれども、其折はいまだ幼なかりければ、今は露ども覚えず。神部、浅間の二神社にまうづ。此の境内には去る廿五年、當神社へ詣でし折植ゑたりし児桜あり。今は枝葉茂り、たけ高くなりたり。それより大藏御祖神社にまうで、境内の瓢池の畔なる四阿にて休み、それより宝物陳列所に至り、この

花さくや姫の時代の衣服なりと傳ふる物、其他、器具、樂器、巻物などを見て、女阪より賤機山にのほり、四方を打ち渡すに、いとよき景色にて静岡市一目に見ゆ。今たちいでしやかたも眼下にあり。こゝにて山田當縣知事より、こゝかしこの山川の名等をきく。前に流るゝは阿部川といふ。水いと清く調布をさらせる如くなり。まだ朝げの事なれば家々のかまどの煙賑はしくたちなびくなど、いとめでたきながめなり。吐月峯、木枯森などのあたりいとよし。げに森の木枯さゆる夜に、峯より月を吐き出すらんとぞ覚ゆる。それよりこゝを下り、大藏御祖神社、樓門の前より車にのり、停車場にむかふ。道すがら多くの学校生徒、市民の見送りをうけ、停車場にいたれば、こゝにても知事、旅団將校、縣官等をはじめ、多くの人に見おくられたり。十時に発車す。折から雨ふりいで、今日のわかれをしみ顔なり。見おくりに来りし人々、かへさになやむらんと思ひやらる。うちすぎ行く驛路の光景、前とかはらず。ところによりて雨もふらず、晴れたる驛もあり。人々多く出で見送れり。汽車の進いと早し。人々とすぎし日のおもしろかりし物語し、又は唱歌などうたひ行くほど、はやう箱根の山にかゝりければ、又こたびも近く富士の高峯をあふぎ見んとたのしみつゝ、車窓によりて打ちながめたれど、折あしくも黒雲おほひてゆたけき姿見えず。裾のみ長くひきたるのみぞ見えたる。くやくしくも雲のうき波たちまちにふじの高ねをおほひけるかな

やうやう空も晴れ渡りたれど、箱根よりこなたは知れる所多く、ことなる景色もなし。午後三時廿分、新橋につきぬ。こゝには、御父母兩陛下、御兄宮同妃殿下の御使を始め、久邇宮、北白川宮満子女王、その他宮内大臣はじめ、あまたの人々の出迎へらるゝをうけ、直ちにやかたに帰りぬ。

情、思へば、此度の旅は、御父母両陛下の深き御恵もて、みゆるしたまはりしなり。さらにより珍らしき物も見、しらぬ所にも行き、うれしくたのしき時をこそ得たりしは、中にもかしこかりつるは、大坂にありし頃、電報もて我等の上をおぼし（以下欠）

解説

一、旅程

まづ今回の旅程（参拝、見学地等）の概略をこの紀行文から次に纏めておく。

六月三日

七時十分高輪御殿発 新橋駅 名古屋着 六時頃名古屋離

宮着 泊

六月四日

名古屋離宮発 名古屋駅 午後三時頃大坂着 住友別邸

泊（以下十二日まで宿舍は同じ）

六月五日

博覧會行啓（美術館 日本赤十字社出品部 臺灣館 アンドル

スジョージ館 教育館）

六月六日

博覧會行啓（工業館 東京府出品館） 第四師團司令部 協

賛會

六月七日

博覧會行啓（工業館 愛知縣別館 参考館 ヘルムー館 マッ

フエー館 ホーン館 加奈陀館冷蔵庫）

六月八日

造幣局 泉布観 砲兵工廠

六月九日

博覧會行啓（機械館 通運館 水産館 林業館 農業館 植物

温室）

六月十日

堺の水族館 妙國寺 住吉大社

六月十一日

阿部野神社 大坂女子師範学校 生魂神社 高津宮 天王

寺

六月十二日

六月十三日 梅田駅発 京都（十時三十分七條停車場着） 博物館 豊國

神社 大佛 方廣寺 八坂神社 知恩院 南禪寺疏水 動

物園 久邇宮御邸泊（二十日まで）

六月十四日

祐の御殿

祐の井 大宮御所（御中殿 常御殿 人麿の社

栄螺山 楓山 御茶室醒花亭）御所（清涼殿 紫宸殿 小御所

御中殿 御学問所 常御殿 迎春殿） 二條離宮

六月十五日

泉山御陵（孝明天皇陵 英照皇太后陵 代々の帝陵） 泉涌寺

（靈明殿）午後別邸

六月十六日

下上加茂神社 梨木神社 北野天満宮 平野神社 金閣寺

（田植） 仁和寺 野々宮神社 嵯峨野の東本願寺別邸 嵐

山遊覧

六月十七日

修学院離宮（隣雲亭 窮達軒 千歳橋 楓橋 紅葉道 赤山神

社 中の離宮 楽只軒）詩選堂 銀閣寺 高等女学校 護王

神社 盲啞院 染織学校 美術学校

六月十八日

桂離宮（蘇鉄山 後園 松琴亭 賞花亭 笑意軒） 織物會社

平安神宮 博覧協會 同別館

六月十九日

伏見稻荷神社 荷田東丸社 三十三間堂 妙法院 東本願

寺 西本願寺 神宮奉齋會 この日下田歌子帰京

六月廿日

六月廿一日

京都発 熱田下車 熱田神宮 名古屋離宮泊

六月廿二日

名古屋発 三時静岡着 静岡御用邸泊

六月廿三日

浅間神社 大歳御祖神社 賤機山 十時静岡発 午後三時

廿分新橋着 高輪御殿着

出発が六月三日、帰京が同二十三日であり二十泊二十一

日に亘る旅であつた。昌子内親王はこの紀行文の初めに「もの知り初めてより、国府津より先は更に知らず。さるはいといわけなかりし折、そこよりや、先迄行きつることもありと聞けど、いとおぼろげにのみ覚えてさだかならねば、こたびをはじめとこそはいひつべきなれ。」と御書きになつてゐる。神奈川の国府津までは行つたことがあるが、それより先は記憶のある中では未踏の地であり、今回が初めての遠出の旅行であると言ふのである。実はこの紀行文の六月廿三日の静岡浅間神社、大歳御祖神社参拝の記事中に過去に櫻をお手植ゑになつたことが書かれてゐる通り、明治二十五年、数へ五歳の御時に静岡へ行啓があつたことがわかる。

二、執筆の動機

この旅の一つの目的が第五回内国勸業博覧會を見ることではあるが、紀行文が書かれた動機は、最初にある「それほど遠き旅路を事なく行かへりて、おもしろかりし博覧會の様どもおぼろげながら書きあつめ置く」ために、「筆をと」

つたのであつた。二十一日間一日も欠かさず筆を執り、記録しておいたと思はれる。日により内容に精粗はあるものの御自分の興味の赴かれたままに自在に筆をめぐらしたこの表現には数へ十六歳であるとは思はれない誠実な心が読み取れるのである。初めての遠出の旅であればなほさらに見聞したものを書きとめ、また自分の心に思ひ返す材料にするといったことがおありであつたのであらう。師の君に添削されてゐるところから個人的に書いたものでもない。単なる紀行文ではなく、おのづと皇族としての認識がここかしこに書かれてあり、読む者にも其の時の場と状況が伝へられる仕組みとなつてゐるのである。しかも同行の周宮殿下はじめ供奉員については、下田歌子以外は一言も触れず、すべて「我等」と言ふ表記となつてをり、努めて内のことより外のことの記述、またそれに対するご自分の感慨を中心にお書きになつたと思はれる。

三、旅の目的

ところで、この旅の目的は何であつたのであらうか。本文の文末にこの旅行ができたのも「御父母両陛下の深き御恵もて、みゆるしたまはりしなり」と御書きである。そして、「さるにより珍らしき物も、見しらぬ所にも行き、うれしくたのしき時をこそ得」たと述懐されてゐるのであつ

て、そこには明治天皇の思召しがあつたことが拝察される。また「中にもかしこかりつるは、大坂にありし頃、電報もて我等の上をおぼし」召されたこと、明治天皇が旅中の内親王に電報を打たれてその様子をお聞きになられてゐたとも書かれてゐる。これらのことや両内親王の大坂行啓については『明治天皇紀』には一切触れてはゐないものの、やはり明治天皇の十六歳と十三歳の姉妹の皇女に対する思召しによるものであつたと拝承するのである。

当時は皇太子嘉仁親王（後の大正天皇）の他、明治天皇の直宮では此の常宮・周宮のお二方と聡子内親王（二十九年生まれ、当時七歳）がいらした。直宮の皇太子の皇子には裕仁親王（後の昭和天皇・三歳）雍仁親王（後の秩父宮・二歳）がいらして竹の園生の御栄えは御安泰であつたと言へる。その一方で明治の新時代における皇室、女子皇族としての教育の面の思召しがあつたと思はれるのである。勿論国内勸業博覧會を見ることにより国内のあらゆる分野における近代化と言ふものを知り、学ぶと言ふ大きな柱があつたであらうが、今ひとつ我國の歴史や文化に触れてそれを体得すると言ふこともあつたと思はれる。これからの皇室を傍らから支へる人物におなりになるであらう皇女に対する明治天皇の思召しはこれであつたと拝察するのである。机上での学問も大切だが、歴史の場に行き過去の故人の思ひに

ふける、または同じ感情を移入することは人間形成の上で大きな役割を果たすものである。そのためには関西は最適の場であり、十六歳と十三歳と言ふ年齢もまた重要であつた。しかもそれは過去の天皇にも繋がるお血筋である皇室皇族と言つた自覚に裏打ちされてゐるものであり、一般とはまた遙かに相違するものである。

京都御所ではまづ御父明治天皇の御誕生所縁の祐の御殿と産湯に使はれた祐の井を御覧になつた。そこで「道すがらまづ中川主殿助のあないにより、祐の御殿、祐の井等を見つ。こゝにて 父帝のあれまし、所ぞときけば、何となくその折のこと忍ばれて、なつかしさいはん方なし。(十四日)」と御書きになるのである。また孝明天皇、英照皇太后の後月輪東山(東北)御陵の御参拝にあつては、「泉山御陵を拝せんとす。(略)孝明天皇の御陵を拝す。それより英照皇太后の御陵にまうづれば、御園に植させ給ひて愛で給ひし樹木の、こゝに移されて今なほ緑深く生ひしげり、そよと吹きくる風の音に打ちさ、やくを聞くにも、何となうあはれにおぼゆ。六とせのむかしは世におはしまし、ものを、今はこの陵の下にしづまりますかとおもへば袖の上たゞならず。只いまし、御代のこともかれこれとしのばるゝぞかなしき。(略)代々の帝の御陵を拝し、(略)泉涌寺にいたり、霊明殿にて代々の帝の御位牌を拝す。

(十五日)」と御書きである。六年前の明治三十年に崩御された英照皇太后についての御感慨は、祖母にあたることからも深いものがあつたと拝察する。この日の午後は特にどこかへのお出ましはなく、御陵の御参拝が主目的であつた上に故人はじめ過去の天皇の御霊への御追慕のお慎みがあつたと拝される。また孝明天皇は当時は先帝であつたことからか御位牌を安置してゐる寺院も多く、その都度御参拝をされてゐる。「妙法院にて、孝明天皇の御位牌を拝す。(十九日)」、東本願寺では「龜山天皇、孝明天皇などの御位牌を拝し、(同日)」、西本願寺でも「孝明天皇の御位牌を拝し、(同日)」である。明治二十三年に鎮座になつた平安神宮には十八日に御参拝になつてゐるが、まだ孝明天皇は奉祀されてゐない。

御所縁の皇族として小松宮彰仁親王がいらしたと見え、その記述が二箇所見える。京の動物園において「故小松宮の、めで給ひし鶴などさびしげに立るを見るもあはれなり。(十三日)」とある。小松宮彰仁親王は丁度この年、明治三十六年の二月十八日に薨去されてをり、まだ四箇月経たない頃であつた。ご交際があつたことが伺へる。また仁和寺にては「故小松宮の御遺品、並にくさぐさの宝物などを見る。(十六日)」とある。小松宮彰仁親王は維新前にこの仁和寺の宮様であつた。

過去の天皇に対してはどうであらうか。十一日に大阪の高津宮に詣でて「高津宮にて我等のいひし所は、昔仁徳帝の民のかまどをみそなはし、古跡なりといふ。今はかま

どの烟にもぎはしければ、神もいかによろこび給ふらんと
思ふもいとかしこし。こゝに後桜町天皇の忍びて行幸あり
し折、用ひ給ひしといふ御しとね今はのこれり。」と御
書きで仁徳天皇の故事を回顧されてゐる。ここにある後桜
町天皇の行幸のことは徳川時代の当時としてはあり得ない
ことでこれは謎である。また十七日の修学院離宮でも過去
の天皇に言及されてゐる。「この庭前には、光格天皇の御
手植の楓あり。こゝは最高き所なれば四方の景色いとよく
て、ひきめぐらしたるやうなる山川たゞ一目なり。古、靈
元上皇の遠方の山より上にと詠じ給ひしも、うべなりと見
ゆ。(略)中の離宮はもと林丘寺と称する勅號ありて、光
子内親王門跡となり給ひき、などいふことゝもくさぐさの
物語あり」光格天皇の御手植の楓や靈元上皇の御製などに
ついて事前に御学習であつたのであらう。尼宮御門跡の林
丘寺についてもご興味があつたやうである。十九日には「
神宮奉齋會に立より遙拝してかへる」とある。京都から伊
勢の神宮を遙拝されてゐるのである。神宮奉齋會は従前の
神宮教院が改組して明治三十二年になつた組織で、その教
会がそれに当られた。これらの記事は皇族としてのお立場

をよく御理解されての記述であり十六歳でも御自覺をお持ちになられてゐたことがよくわかるものである。

四、内国勸業博覽會を御覧になつて

内国勸業博覽會は内務卿大久保利通の主導により第一回
が明治十年に東京上野で開かれて以来、十四年に第二回、
十八年に第三回と共に国内の産業發展振興のために東京上
野で行なはれてきた。第四回は明治二十八年、日清戦役の
戦捷に沸く中、京都にて行はれてゐる。折りしも平安遷都
千百年に当り盛大であつた。明治三十六年の第五回は名古屋、大阪、東京の候補地の中から大阪が選ばれ、初めて大
阪今宮（付、堺市大浜公園）の地で三月一日から七月三十一
日までの間で開催された。それゆゑ大阪の底力を示す博覽
會とすべく意が注がれたのであつた。『大阪ト博覽會』第五
回内國勸業博覽會協賛會編参照。中でも農林、水産、工業、
機械、教育、動物、水族の八館を設け、更に通運館、参考
館と日清戦役で日本の領有となつた台湾の固有文化を紹介
する台湾館が設けられて、様々な物が展観されたのである。
またこの折から外人が国内で採取製造したのものをも参考館
に出品できることとなり一層活況を呈することとなつた。
そこへの行啓は五六七九日の四日に亘られ多くの展観を御
覧になられた。「工業館に行き、焼物、織物、銅鉄の細工

などを見(七日)、「美術館を見る。刺繍、彫刻、繪画などのたくみな品々あり。そが中にも天鷲絨にて織出せる世界三大景、獅子の縫ひとりなど、いとすぐれたるやうに思はれたりき。(略)日本赤十字社出品部にいたり、野戦病院にて用ふる品々、擔架など見、(略)臺灣館にては土人の用ふる舟器具、武器、風俗などの有様のうつせるを見たり。(五日)」、「七寶焼の麗しき花瓶など、いと多く、げにこたびの博覽會のうちにも、この焼物などは殊に勝れたる由(七日)」「参考館にては、諸外国の種々の出品あり。

それより加奈陀館、冷蔵庫等へ行く。この庫は実にいと冷やかにて、時ならぬに梅藤などの花盛りに咲き匂ひたり、なほ進み行けば白雪つもりて夏なほ寒き心地す。かくあまりに寒暖の変化はげしければ、奥ふかくは入る事を得ず。(同日)」などとの御感慨から様々な殖産工業の実物、美術品、外国の冷蔵庫など近代の文明のなせる新たな展示を御覧になつての驚きと深い感慨とが述べられてゐる。日本赤十字社の野戦病院の展示なども当時の皇后(昭憲皇太后)の赤十字に寄せる思召しを知れば、女子皇族としての格別な思ひがあつたのではなからうか。また日本領となつてまだ十年と経たない台湾館の展示なども興味があつたやうである。なほ当時の皇太子殿下(後の大正天皇)はこれに先立ち、五月二十六日に東京発、二十八日から三日間会場に

行啓されて種々の展示を台覧なされた。最終日の二十八日には同様にイルミネーションや花火を御覧になつてゐる。

五、種々の御見學と御感想

この関西の行啓は博覽會の見學が目的であつたにせよ、その他の見學地においても多くの感想が書かれてゐる。全ての見るもの聞くものが新鮮な感動であり、そこには十六歳とは思えぬほど、ご自分の意思を明確にお述べになつてゐる。

八日に大坂の造幣局を見學され「参考館よりはじめ、こがねをとかし鑄がたにいれ、鑄あぐる様より始めて、大小の通貨となす迄、なみなみならぬ人の勞を目のあたり見て、たからの價いよいよたふとくおぼえぬ」と貨幣の製造過程と人の勞力を思ふと、更に貨幣の価値が増すとの感慨を御書きである。また同日、大坂の砲兵工廠にて「金の流れ、はがねの瀧などを見つ。いとあやふき業なれども、これ等の業する人々は、なれたる様にて事もなげに働く様、いといみじくおもしろかりき。」と製鉄の過程を御覧になつて、従事する人への思ひと人の勞力についての思ひが書かれてゐる。更に「通運館にては船の模型、昔今のふみのゆきかひぶり其他種々のものを見(九日)」たのであり、堺の水族館では「様々のめづらしき魚ども、あまた玻璃もて天井

などにかこまれたる、其内の岩のた、ずまひ藻のつける様まことの海とことなる事なく、潮水絶えず行きめぐれば、魚も海中に在るがごとく、かれひなどの平たき衣かとも思はるゝばかりなるもあり。其他種々珍らしきものあり。(十日)」と初めて御覧になる水族館の感慨、また東本願寺での消防設備について「火防噴水を見る。こは昔よりこの寺の数度火災にかゝりしが故、近時この禍を防んとして設けられたるものにして、其の水の高さ百三十尺餘迄上り、飛沫四方に散乱して衣をうるほせり。一大奇観なり。(十九日)」といづれも明治の近代化の時代の我國の発展によせる驚きと期待とが素直に述べられてゐる。その一方で昔を偲び学ぶ態度もお忘れではない。京都の御所や仙洞御所では「夜のおとゞ、昆明池の障子、朝餉の間、櫛形の窓などを見れば、文の上に学びし昔のありさま、目の前にうかぶこゝちす。(十四日)」と古典文学で学ばれたことの追体験をなさり、修学院離宮においても「正殿、杉戸襖、小襖、壁張付などの繪は皆名人の筆にて、山鉾の図、友禅染の図、又雲上人の筆なる離宮八景などは、古びたれど目をおどろかすばかりなり。中にも住吉具慶の、網中の大鯉の図はいとたくみにて、ふすまをぬけいで、池にをどりいたりと傳ふるも、空言とは覚えぬ迄見ゆ。(十七日)」など住吉具慶の絵などは紀行文に纏めるために記録をお取りになつて

ゐたことも伺へる記述である。また「織物、焼物、其他この地の産物いと多く陳列せられたるを見る。また別館の方には、いにしへの器具、装束、武器その他種々ありて、ものまなぶ我等には、いとよき参考となりぬ。(十八日)」や、西本願寺で「飛雲閣を見る。こゝの襖壁などの画は何れも名工のかきしものなり。中にも床の張付の富士山の画は、狩野元信の筆にて、座して見あぐればほのかに山の姿見ゆれども、あひむかひては見えず。(十九日)」などもある。昌子内親王は絵心をお持ちであつたやうで、この旅の途中で「繪にかゝまほしき所数知らず。」であつたやうである。それゆゑに住吉や狩野など、絵画に対する思ひはなほ篤かつたやうでもある。現代また過去のものとなり混ざる明治の御代にあつて、ある意味での温故知新を学ばれてゐたことが拝察されるのである。

六、神社の御参拝と和歌

この旅行で御参拝になつた神社は、住吉大社(十日)、阿部野神社、生魂神社、高津宮(十一日)、豊國神社、八坂神社(十三日)、下上加茂神社、梨木神社、北野天満宮、平野神社、野々宮神社(十六日)、護王神社(十七日)、平安神宮(十八日)、伏見稻荷神社、荷田東丸社(十九日)、熱田神宮(廿一日)、浅間神社、大歳御祖神社(廿三日)の十九社

である。なほ吉田神社には時間がおしたため使ひを派遣されてゐる。神社参拝に関しては社名のみ書く場合が多く、どのやうな感慨をお持ちになつたかは定かではないが幾つかの記述や和歌からその思ひが拝察できる。

『住吉大社史』下巻三百八十頁に御参拝の記事がある住吉大社では「住吉にいたり数多の社かしここ、ふしをがむ(十日)」と四社の参拝のことに触れ、皇室ゆかりの賀茂神社(下上社とあり、御祖神社と別雷神神社と双方の参拝と考へるが、その別の記述がない。御祖神社のみか。)においては「祭りの時用ふといふ、昔ながらの装束、及びいろいろの宝物などを見(十六日)」たのであり、その時詠まれた御歌

大君の栄ゆく御代をまもりましかものやしろをけふあふぐかな

からその思ひが伺へるのである。「大君の栄ゆく御代」がその感慨である。

二十一日に熱田神宮へ参拝された。「神嘉殿にて拝しをはりて直に宝物を見る。(略)この宮は、三種の神器の一つなる、御剣をまつれるよしなるが、げに宮居のありさま昔のまゝにていとたふとし。」と三種の神器の一つである草薙の剣について御書きである。社殿について書かれてあるが、これは明治二十四年の伊勢の御遷宮の撤下の御殿を拝受して、従来の尾張造りのものから神明造りのものに改

められたものであつた。帰途お立ち寄りの静岡の浅間神社では十一年前のことを懐古されてゐる。「浅間神社にまうづ。こゝは先年もまうでし事あれども、其折はいまだ幼なかりければ今は露ほども覚えぬ。神部浅間の二神社にまうづ。此の境内には去る廿五年、當神社へ詣でし折植ゑたりし児桜あり。今は枝葉茂りたけ高くなりたり。(二十三日)」とあるが、この折の行啓はどのやうなことであつたか不明である。『浅間神部神社誌』(大場磐雄編)にはご参拝の記事がない。

ところで、この紀行にお詠みになつた和歌は十七首である。次に掲出しておく。

するがなる不二の高峯をうち見れば夏ともわかずゆきのつもれる(三日富士山)

たとふべきものこそなけれ大空のみどりにつゞく三保のまつ原(同日三保松原)

武士の露ときえにし関ヶ原こゝやむかしの戦のには(四日関が原)

名にしおふ瀬田の長橋車よりうちわたしゆく旅ぞたのしき(同日瀬田)

車より四方をながめて行く程にはやおほさかにつくぞうれしき(同日大坂)

海原のそこにすむなるいろくづもあふぎ見るよとなり

にけるかな（十日堺水族館）

大空のみどりにつゞく住吉の老木のまつは幾代へにけむ（同日大阪）

あをあをと若葉しげれる音羽山おちくる瀧の音もすゞしき（十三日清水寺）

大君の栄ゆく御代をまもりますかものやしろをけふあふぐかな（十六日下賀茂）

しげりあふたゞすの森を吹きわたるかもの神かぜなつとしもなし（同日同所）

大神のめぐみのつゆとみたらしのきよきながれをむすぶ今日かな（同日同所）

もろこゑに田歌かたひて賤の女がいとまなげにもさなへとる見ゆ（同日）

みやしろはあれはてたれど今もなほくろ木の鳥居くちのこりけり（同日野々宮）

あし引の山田のかはづさなへとるしづにもなれてたえず啼なり（同日嵯峨野）

そらに飛ぶ螢の影も水にすむかじかの聲もなごりなりけり（二十日）

千早ふるあつたの宮をゆくりなくをろがむけふぞうれしかりける（二十一日熱田）

くやしくも雲のうき波たちまちにふじの高ねをおほひ

けるかな（二十三日富士山）

紀行の文をはじめ、これらの歌が十六歳の少女の作であることに目を瞠るのである。御父明治天皇は歌を多くお詠みになられたが、昌子内親王にも早くから歌を学ばれるというた庭の訓へがあつたことと思はれる。下田歌子の影響であらう。歿後『松のしづく』と言ふ遺歌集が竹田宮家で編まれたのもそれゆゑであつたのだらう。なほこれらの歌は『松のしづく』に採られてゐないこと、前述の通りである。

七、同齡の子供達への思ひ

昌子内親王は皇族であつてもまだ十六歳（数へ年）であつた。ご自身の皇族であるとお立場は同じ年齢、またはそれよりも幼い子供達に対してかなり複雑な心境であつたことと思はれる。この紀行文にもそのやうな子供達に対する思ひが素直に書かれてゐて注目される。十一日の大阪は雨天であつた。「このところの小学校の生徒ら、あまた雨にぬれつゝ立ち並びて、我等をむかふるさまいとあはれなり。それより大坂女子師範学校に行く。こゝには堂嶋、清水谷両高等女学校の生徒も集ひ居り。各生徒の製作品、繪画などを見る。」ご自身は車での御移動なのであらうが、奉迎の生徒は雨中傘もささずに並びゐるのであつて、それ

は「いとあはれなり。」であつた。また十七日の盲啞の学校への行啓記事はそれらの生徒への深い思ひの文となつてゐる。長いが次に引く。

盲生、啞生の、不自由なる身もて種々の事を学ぶを見れば、ひとしほあはれにて、目の見ゆるものいかでいたづらにあるべきか、などぞおもひし。はじめ八つ九つばかりなる男の子の、目しひたるが、けふ我等のこゝに来つるよろこびを文につくり、あまたの盲生に代りて聲さわやかによみいでし時は、いたはしき限りなく、めの見ゆるものなりせば、我等のすがたも見まじものを、只心のうちにおしはかりてよろこべるさま、いとあはれにて物たちどころにふたがり、すゞろに涙さしぐまれぬ。ともの人々皆袂をうるほしたり。また啞生は目こそ見ゆれ、物いふすべをしらぬものなれど、ひらけゆく御世のめぐみには、おほつかなくも物いふ事を得て、こも亦我等の来たるよろこびをのべたるにおどろかれぬ。よのつねの人々だにあるを、況てかゝるたらはぬ人々を教へ導く教師の労苦、いかばかりならんとまづおしはかれぬ。

目の不自由な生徒に対し「ひとしほあはれにて、目の見ゆるものいかでいたづらにあるべき。」と気の毒の思ひと健常者のとるべき姿勢を述べ、目の不自由な男子が歓迎の

言葉述べたことについて「いたはしき限りなく」「いとあはれにて、物たちどころにふたがり すゞろに涙さしぐまれぬ。」と落涙に及んだのであつた。また言葉の不自由な生徒に対する思ひとそれを導く教師の苦勞を犒ふのであつた。皇室が肢体不自由な者に対して振恤の思召しがあることは古くからのことであるが、ここにもその強い印象が描かれてゐる。行啓先は御自分の意志であつたのか、または明治天皇や則近の御指示であつたのか定かではないがこのやうなことが重要なのである。帰京間近の頃に「学校生徒のあなたよりおひおひ近づきくるも、我等になごりを惜しみてにや(二十日)」などあるのも子供に対する近い思ひと拝察するのである。

八、軍人や市民の歓迎への思ひ、

この紀行文中に警護の軍人に対する記述があるが、例へば「離宮をさして行く。道すがら兵士などの立ち並びてむかへたる様、赤き心のほど見えていとうれしかりき。」などは名古屋離宮への道々に立つ兵士への労ひの思ひである。まだ日露戦役前のことであるが「城内に立ちならぶ兵士は前と同じ。実にこれら軍人は一度ことある日には命をすて、君国に為につくすと思へば、限りなくたのもしく、また何となくあはれにも思はれたりき。(二十一日)」など

との記述には皇室の軍人に対しての思ひが伺はれるものである。常宮周宮両内親王は日露戦役での戦歿者への深い思召しから靖國神社のご祭神の靈璽簿をお自身で浄書され、奉納されたのであつて、その思ひは既にこの頃からあつたのである。

市民の奉迎に対してもある意味で感謝の念が伺はれる。嵯峨野では「我等のけふこゝに来つるをよろこびて、里人つどひ花火うちあげなどす（十六日）」であり、京都を離れる時も「道すがら高等女学校生徒等立ち並びて、我等を見送れり。（二十一日）」また静岡に着き、「こゝにても尚、旅団將校、其他縣官達出でむかへ居り。又道すがらも学校生徒ら多く立ち並びて、我等を迎ふるを見たり。（二十二日）」とあつて、翌日には「道すがら多くの学校生徒市民の見送りをうけ、停車場にいたれば、こゝにても知事、旅團將校、縣官等をはじめ多くの人に見おくられたり。（二十三日）」とある。汽車の車窓からは通過する駅、沿線に目をやり「人々多く出で見送れり。」と書いてゐる。皇族であるからその特別な扱ひは当然ではあつても、それを当然とは受け取らず、常に謙虚に振舞ふのである。それを十六歳の少女が普通にこなしてゐるのである。皇女の教育の水準の高さがこの紀行の行間に読み取れるのである。

九、旅行の感慨

最後にこの旅行の感慨をまとめておかう。何にせよこの旅は十六歳の皇女にとつて様々なことを学ぶとともに多くの人に出会ひ、また車窓越しに市民の暮らしを見るなどして皇族としての自覚を新たにしたことであらう。

一泊目の名古屋離宮は、全てが新鮮な驚きであつたやうだ。「古き城のうちになるやかたの珍らしくて、襖壁などを見る。こゝ、かしこの縁はうぐひすばりなれば、時ならぬにゆかしき春の聲をきくこゝ、ちしておもしろし。（三日）」などとははじめから十六歳とは思へぬ筆遣ひである。「しばしありて後、臥戸にいりぬれど、明日の事ども思ひやられていねもねられず。いとたのしく思ひあかしつ。（三日）」などは興奮してなかなか眠れない子供心のことをそのまま書いてゐる。

大阪のイルミネーションなどはかなり印象深いものであつたやうである。到着すぐに「今宵は我等が爲にとて、六時頃よりイルミネーションももうけられていとうるはしく、ふくる迄眺めていたのしかりき。（四日）」とあり、離別の折にも「もはやこゝをあとにして立ちいづることよと思へば、いと名ごりをしう覚ゆ。なほ今日を限りと思へば、茶臼山の松のけしきも一しほゆかしく、ウオーターシュー

トの音、イルミネーションの光も我等をとゞむる心地す。
〔十二日〕と書いてある。熱田神宮参拝の折にも「かく人々の我等のために心を用ひくる、よと思へば、いとうれし。〔二十一日〕とあり、人々が自分の為にくれることへの感謝となつてゐる。

また新たな発見や驚きもあつて、それを素直な表現で御書きである。「正門の夜景を見んとて行きぬ。第五回内國勸業博覧會と記せる十の文字を、電氣にて筆もてかきしるす如くに點じあらはすなど、実に世のすゝみ行く様見えて、目驚かるゝ事ども多かりき。〔九日〕などはその代表であらうか。また先にも触れたが十六歳の少女とは思へない記述も多い。「知恩院に行く。こゝはいとひろくて、廊はいたとところおほかたうぐひすばりなり。又庭の池には河骨など花さきて、いとうるはしき眺めなり。〔十三日〕と、また久邇宮邸のことを「夕ぐれになれば河鹿の聲もきこえ、暮れもてゆくまゝに蛩おはんとて、里のうなゐらうちむれてさわぐ等、ありし都にしらぬけしきなり。この川水音高くて、常に雨そゝぐ如きこえ、朝夕はひとへの衣手さむきばかり涼し。」などと細かに描写するのである。桂離宮の描写においても「こゝは御茶屋も庭もみやびをつくされたり。此道すがら右の方池のうちに、天の橋立の景色をつくられたる面白し。この地に赤き河骨あり。いと珍らかなる

ものなり。こゝをのぞきて他にある事なしといへり。(略)さゝやかなる柄杓の石に、かけ渡したところなどいとかし〔十八日〕と的確であつて大人の筆致である。その一方でまだ幼い面影を残してゐる記述もある。「池にはあまたの龜すみて、与ふる麩をとらんとて、あらそひ浮びつどふさまいとおもしろし。〔十一日〕「池の魚に麩を与ふれば、数しれず浮び出で、餌をあらそふさまいと面白し〔十六日〕」などがそれである。また「こよひ一夜にて明日は都にかへるよと思へば、夢の如くにてなごりをしく、いますこしこの地にもありたき心地もせられ、又何となくうれしくも思はれけり。〔二十二日〕」や翌日の「今日は都へかへる日ぞと思へば、さすがにいとうれしかりき。」などはまだ旅をしてゐたい思ひと帰京の思ひの織り成せる複雑なものであり、旅の疲れはあるものの初日の興奮に近いものがあつたであらう。

なほ京都の宿泊地である久邇宮邸は上京区東桜町二十七八番地にあつた。滞在中に見える久邇静子女王(子爵水無瀬忠輔一女、明治十七年生)は多嘉王妃である。また新橋にお出迎への北白川満子女王は能久親王第一女子でこのあと明治三十七年に甘露寺受長に降嫁された。

近代化の進む明治三十六年と言ふ年に、明治天皇の皇女

と言ふお立場で、まだ十六歳と言ふ若さの内親王が、内国勸業博覧會を初め、皇室所縁の関西の地を十日余を旅された紀行文から、様々なことがその文章や行間から読み取れるのである。明治天皇の思召しは多くの人に会ひ、物に触れて、過去を学び未来を見据ゑ、何よりも皇族としての自覚を持ち、視野を広く持たせることにあつたやうである。そして昌子内親王はそこご期待に沿ふべくこの旅を通して御自覚を深められたのであつた。そしてこのことは今に至るも我が皇室においても変はらぬ庭の訓へであり、お姿であるのである。

（東京都立小岩高等学校主幹教諭・國學院大學兼任講師）